文 献 紹 介

小塩和人著：

『水の環境史―南カリフォルニアの二〇世紀―』

玉川大学出版部　2003年3月

A5判　297頁　4200円（本体）

年降水量327mm。これは『理科年表』に記されたロサンゼルス国際空港における年降水量の数値である。ロサンゼルス市とその周辺部はアメリカ合衆国で2番目に人口が集中した大都市圏である。どうしてこのように少雨の地域に大都市が形成され経済が発展してきたのだろうか。これは実に興味をそそられる歴史地理学的な研究課題である。巨大都市圏が成長し経済が発展する過程において，科学技術の発達が水の獲得に大きく寄与してきたこと，水を確保して供給するための組織や政治の力が存在したこと，そして水に対する人間の認識が時代とともに変化してきたことなどが容易に想像できるだろう。

アメリカ合衆国において，アメリカ西部における水の問題に歴史学研究者が関心を寄せるようになったのは1960年代以降のことであるという。日本においては，アメリカ研究者の数が限られており，しかも西部に関心を寄せる研究者が少数派であるという現実を反映して，本格的に水に関する問題に取り組んだ研究は，歴史学でも地理学でもその他の関連分野においてもほとんどないのではないだろうか。この課題に挑戦した著者は，アメリカ合衆国の公共政策史を専門とする気鋭の歴史学研究者である。研究の資料として利用されたのは，水利政策の立案・実施・評価に携わった人々に関するオーラルヒストリー，地方自治体・州・連邦政府などの公文書，新聞や雑誌の記事など，膨大な文書記録である。

本書の構成は次の通りである。序章　水のアメリカ史，第一章　新しい公共哲学の台頭―一八五〇～一九一〇年，第二章　繁栄と資源開発―一九二〇年代，第三章　大恐慌と戦争と水利事業―一九三〇～四〇年代，第四章　水の生産から消費へ―一九五〇年代，第五章　大きな政府の役割―一九六〇年代，第六章　環境時代の到来―一九七〇年代，第七章　利水治水からの脱却―一九八〇年代，第八章　保水親水への転換―一九九〇年代，そして，終章　効率と公正と生態系。

ほぼ十年ごとに時代の特徴と水をめぐる社会の変化が検討されており，目次を見ただけで一世紀あまりにわたるカリフォルニアの展開をイメージすることができる。第一章では，乾燥した自然環境のもとで南カリフォルニアが急速に発展する中で，水を獲得し利用するために法体系も行政組織も変化し，水をめぐる新しい公共哲学が誕生したことが論じられる。第二章では，急速な経済発展と楽観主義の時代に，都市圏水道局が設立される経緯を詳述する。第三章では，大恐慌から第二次世界大戦後の時代に，コロラド川の水をロサンゼルスまで供給するための地政学が描かれる。第四章では，経済的繁栄の時代に水不足が深刻化し，水の確保に奔走する南カリフォルニアと，大規模水利事業に進出する州政府の動向が分析される。第五章では，経済的繁栄の続く一九六〇年代に，コロラド川をめぐる問題，そして北カリフォルニアからの水供給をめぐる問題が深刻化し，環境保護に対する認識の増大とともに，都市圏水道局の拡大主義が転機を迎えたことが指摘される。第六章では，環境破壊に対する認識と環境保護の機運が高まる中で，史上最悪の水不足を経験し，都市圏水道局の水利政策が根本的な見直しを要求されることになった流れが論じられる。第七章では，水利開発よりも環境保護を優先するという価値観が支配的となった時代に，都市圏水道局が直面した課題が提示される。第八章では，従来の水利政策に対する異議申し立てが繰り返される時代に，都市圏水道局の役割に対して厳しい議論が行われたことを紹介する。終章では，環境と水に対する認識が変化する中で，公共事業に対する評価が変化してきた過程をまとめており，21世紀の課題が展望される。

もともとアメリカ合衆国の制度や組織は雨の多い東部の実態に基づいて形成されたため，西部の乾燥した地域では東部の伝統を修正するために新しい実験が行われなければならなかった。それは水利権をめぐる闘争であり，公共事業に対する政府のかかわり方の問題であり，大規模水利事業を

実施するための土木事業の展開であった。本書は，都市圏水道局に焦点を当てながら，ロサンゼルス市とその周辺の自治体，ロサンゼルス郡，近隣の郡，カリフォルニア州政府，近隣の州政府，連邦政府という異なった行政スケールに着目することにより，広域化する水利政策の展開をアメリカ社会の文脈で検討する。一世紀あまりにわたる南カリフォルニアの水をめぐる問題，そして水に関する制度や組織を，政治的な風土の文脈から議論している。南カリフォルニアの歴史を水に関する公共政策に着目して概観した本書は，まさに魅力的な試みであるといえるだろう。

本書によって，南カリフォルニアにおける，そしてアメリカ合衆国における水をめぐる政治のダイナミズムが明らかになった。これは大きな学術的貢献である。一方，本書は組織や政治に主に関心を注いでおり，水の供給にともなって地域の姿や住民の生活が変化して行くプロセスは明らかにはされていない。また，大都市圏への水の供給がおもな研究対象であり，農業地域への灌漑用水の供給については関心が払われていない。一冊の本にすべてを期待できないのは当然のことであるが，本書が『水の環境史』という壮大なタイトルを掲げているだけに，触れられなかった課題について気がかりになるのは私だけではないかもしれない。

歴史地理学の立場からみると，本書はカリフォルニアの発展を理解するための基本文献として評価される有益な本である。地理学においては，インペリアルバレーの開発，コロラド川流域の開発，カリフォルニア州の水利事業など，水の広域の移動にともなう地域の具体的な変化におもに関心が寄せられてきた一方で，水をめぐる公共政策に関して分析は行われてこなかった。地域変化を研究するためには歴史的文脈と政治構造についての理解が不可欠であるが，本書はこのような地理学の欠落部分を十分に補ってくれる。『水の環境史』の知見に基づいて南カリフォルニアの地域変化を実証的に描くのは，まさに歴史地理学者の出番だといえるだろう。最後になるが，21世紀は水の世紀といわれ，水をめぐる競合が深刻化しそうである。水不足というストレスと戦いながらも人口増加と経済発展を経験してきた南カリフォルニアの事例を分析することには，大きな社会的意義が存在することはいうまでもない。

（矢ケ崎典隆）